

令和８年度 第１回奈良市社会教育委員会議 会議録				
開催日時	令和８年７月１０日（金）午後２時３０分～午後４時００分			
開催場所	奈良市役所 北棟４階 ４０２会議室			
出席者	委員	安藤委員、岡田和委員、岡田龍委員、加藤委員、紙家委員、小北委員、柴田委員、中村委員、廣瀬委員【計９人出席】		
	事務局	教育部長、教育部次長、地域教育課長、地域教育課 課長補佐、奈良市生涯学習財団事務局長		
開催形態	公開（傍聴人０人）	担当課	教育部 地域教育課	
議題又は案件	(１) 令和８年度補助金交付社会教育関係団体について (２) 奈良市社会教育推進計画の改訂について (３) 奈良市社会教育推進計画に基づく事業報告について (４) 令和７年度社会教育委員事業実績について (５) 令和８年度社会教育委員事業計画について			
議事の概要及び議題又は案件に対する主な意見等				
(１) 令和８年度補助金交付社会教育関係団体について 【委員からの意見・質問等】 ・奈良市子ども会育成連絡協議会運営補助金について、会員減少に伴い、会費がほぼそのまま保険料として支出しており補助金のほとんど全てが管理費につかわれている。また昨年度は団体事業である「子ども会のつどい」も中止するなど、活動実態が極めて少ない状況が指摘された。子どものために一生懸命されているのはわかるので活動を否定する訳ではないが、この経理は見直しが必要ではないか。削れるところはないか見直ししていただかないと、次年度このままでは交付は難しいとの意見があった。 ・奈良市スカウト振興会（旧ボーイスカウトわかくさ地区協議会）について、県連盟が地区を廃止し県下１つの団体にまとめたのに、なぜ市単位で独自に団体を新設したのか。新しく社会教育関係団体は他にも立ち上がっている中で、この団体に補助することは市民からの納得感が得られにくいことを懸念する声が上がった。ジャンボリー大会がない来年以降、補助金の申請内容等も含め、誰が見ても納得できる社会教育の推進にかかる役割・補助金の必要性を明確にさせていただく必要がある。 ・本来なら様々な団体の活動内容を審議したうえで補助金を分配する形が望ましいが、今後補助金のあり方そのものの検討が必要との問題提起がなされた。また奈良市生涯学習財団も含めて、公金だけで運営していこうとするのではなく、事業をして税金を払ってでも運営を回す努力をしていただく必要がある。社会教育委員会議としてそれらの団体をどうサポートできるかを考えていくべきである。				

＜補助金交付について承認された＞

(2) 奈良市社会教育推進計画の改訂について

＜事務局より資料説明＞

今年度実施した「まなびのアンケート」結果を報告した。また現行計画の「まなぶ、つながる、ささえる」理念は継承しつつ、各テーマが循環することを目指すこと、また評価対象事業は従来の事業から主要な「重点事業」に絞り込むことで深く審議できるようにするというこれまでの議論を踏まえて、重点事業候補を提案した。

【候補1（教育委員会事業に特化）】：公民館（公民館の活用）、地域学校協働活動（地域と学校の協働による取組の推進）、図書館（図書館の充実）

【候補2（他部局等の事業も包含）】：公民館（公民館の活用）、つながりサポーター（子ども・若者育成支援の推進）、市民活動（ボランティア・NPO活動の活性化）

なお評価方法について、現行計画のPDCAサイクルの他、AARサイクル（Anticipation 見通し、Action 行動、Reflection 振り返り）を提案した。

【委員からの意見・質問等】

1. 重点事業の選定

- ・人づくりを支えるリソースとして施設があるからこそ人が育ち地域のつながりが保たれる面もある。ただ「公民館」「図書館」というとハード（建物）の側面を想起させるので、もう少しソフト面（人づくり・つながりづくり）を表に出した事業展開の見せ方をしてはどうかと思った。ただ資料の素案の見せ方であればその意図は伝わると思う。（現計画でめざす目標のあとに、「関連する事業として代表的なもの」（前計画掲載事業）が提示され、その内3つの事業を重点事業として設定する見せ方）

→単なる施設として見ているのではなく、専門人材がいる拠点としての価値に着目している。専門人材がいる場所をどう活用し、ただまなぶだけでなく、地域課題解決に資する人がどう育っていくかという「循環のプロセス」を、社会教育の視点からどうエンパワーメントできるか、という意図で公民館や図書館を挙げている。

- ・候補2にある「つながりサポーター」を選ぶとすれば、対象が限定されすぎたり福祉のイメージが強く社会教育のイメージが湧きにくいのではないか。

→この事業自体の成果ではなく、この事業が社会教育的な循環を見据えた展開の形になっているかを見る

- ・図書館には司書がいるが、利用者がどうしても偏っている印象がある。本を読むだけなら別の場所でもできるが、図書館が社会教育として果たす役割とは何か。

→今の図書館は「静かに本を読む場所」から脱却しつつある。人が集まり、知的な刺激に触れながら交流したり、親子が気軽に集える活動の場に変化している。司書の役割も、従来の本の保存・整理・貸出に留まらず、地域住民の活動を支える役割にシフトしている。公民館も同様である。

→本屋が消えゆく中で図書館の果たす役割は非常に大きくなっている。他市では司書が非常に能動的で、教科書展示やポップの工夫など、気軽に来てもらえる工夫を凝らし、新しい居場所を模索していた。ただ、学生からは「5時閉館では学校帰りに寄れない」との声もあり課題もあるが、地域において大切な役割を果たしていると実感した。

→図書館はもともと「本を読む人」が行く場所だったが、今はネット等で本が読める時代になり、わざわざ行かなくなっている。だからこそ「本に興味がない人」「自分が何に興味があるかまだ気づいていない人」が、偶然何かに出会える場にするための工夫がこれからの図書館の役割ではないか。

→中学校の図書室でのボランティアを行っているが、いくら新刊を入れ、掲示を工夫し「おしゃべりするだけでもいいからおいで」と呼びかけても、なかなか生徒が来ず実を結ばない。一方で、公民館の図書室に下校途中の子どもたちが本を借りに寄る姿も見られ、場所ごとの実態は様々である。

2. 評価方法について

- ・評価を形にすること（数値化など）は難しくなるかもしれないが、実際活動する側の実感としては、PDCAよりもAARの方が圧倒的に回しやすい。年度末に終わったことを評価して

も遅い。やりながら評価し、変化させていく形は非常に実効性がある。 ・自分たちが実際に活動するときは、まさにこの AAR（振り返りながら次をどうするか考える）を行っている。これは個人レベルの自己点検としては非常に自然なサイクルだが、果たして「行政組織」としてこれがうまく機能するのか整理が必要。 ・これまでの PDCA サイクルによる評価（数値目標/KPI の追求）が実質的にうまく機能していない（Check から Action につながらず前年踏襲になる）現状がある。 ・PDCA は工場の生産管理などには向いているが、不確実な「人づくり・社会教育」の現場では Action（改善）に繋がらず、結局前年踏襲のルーティンに陥りがちで、指標そのものが形骸化する要因になっている。数値目標に縛られて身動きが取れなくなるより、AAR のようなアプローチで「行動しながら、議論しながら、人や事業を育てていく」方向で試してみる価値はある。 ・年に 2～3 回の限られた社会教育委員会議の時間で、多くの事業を深く見ることは不可能であるので、重点事業を絞り込み AAR に基づいた深い議論や助言をする形にするのが望ましい。 ⇒議論の結果、「公民館」「地域学校協働活動」「図書館」の 3 つを重点事業として設定する。次回会議までに「重点事業案」を示す。また評価手法については、AAR サイクルを用いて社会教育をみんなで議論し人づくりをしていく方向性で検討を進めることとした。ただし AAR サイクルについては、行政組織や事業の評価に用いる際の課題や、客観性・説明責任の確保についても、引き続き整理する。 （3） 奈良市社会教育推進計画に基づく事業報告について ＜事務局より資料説明＞ （4） 令和 7 年度社会教育委員事業実績について ＜事務局より資料説明＞ （5） 令和 8 年度社会教育委員事業計画について ＜事務局より資料説明＞	
資	料
	・ 次第 ・ 資料 1 ～ 5